昭和18年8月21日　最期の日

藤村の死を看取った静子夫人が甥に宛てた手紙
(中央公論 昭和18年10月号『一人の甥に与うる手紙』より)

九時半ごろ、伯父さまは書斎から出てこられて、茶の間の前の廊下に立って庭を見ています。

「まだあすこを書いているんだよ、しかしこんどは思うように出たと思うがね、あすこが出来てしまえば、あとは雑作ない、和助が東京を立つだけだから…一寸今、読んでみてもらおうか。」

「原稿を読んでしまったら、きょうはお菓子をつくってくれ。」

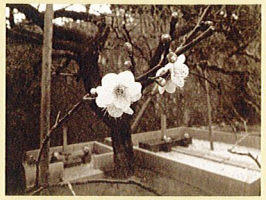
茶の間で伯母さんが茶棚をうしろに机に向かい、伯父さまが机をはさんで端座して聞いていらっしゃる。

「青山半蔵には中世の否定ということがあった…」

その行から三四行読んだ頃、

「ひどい頭痛だ」

と小さい声で唯一私が聞いたと思うそのうち、伯父さまはもう身がるく立って、茶棚にある常備薬を取りに行きましたが、伯母さんに倒れかかりました。



「どうしたんだろうね。」

いつも通りの静かな伯父さまの声。

「気分もよくなってきた、頭痛もしないよ…眼まいはちっともしない…涙を拭いて…」

「原稿が間に合うかね、そう50枚あるし…あそこで第三章の骨は出ているしね…」

東の方の庭に眼をやってじっと見ているかと思うと、

「涼しい風だね」

庭から眼を離さず気もちよさそうに涼風の過ぎるのを感じているようです。もう一度

「涼しい風だね」と……。

そのまま深い昏睡、意識は遂にかえらず、翌22日午前0時35分に大磯の地で永眠。

『東方の門』は「和尚が耳にした狭い範囲だけでも」までで遂に未完で終わりました。

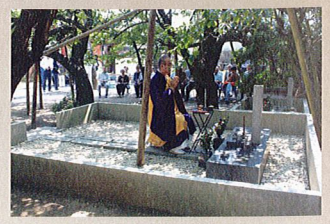
地福寺　～藤村夫妻の眠る寺～

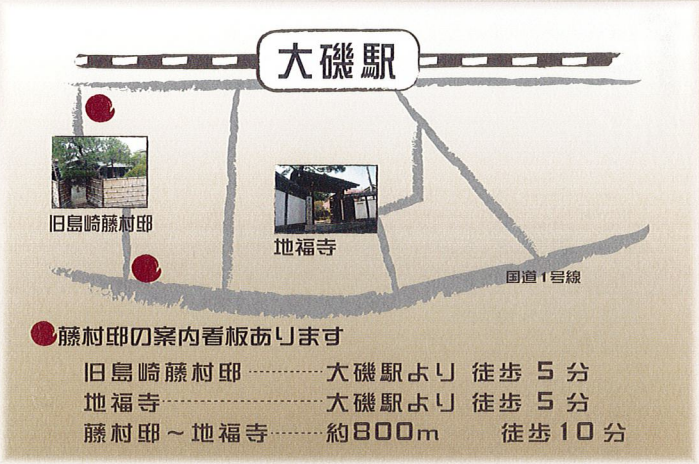
境内の梅林は藤村が非常に気に入っていた場所で、生前、自らの墓所として希望していました。今では梅の名所として知られ、樹齢100年～200年の古木、約20本に囲まれて藤村夫妻の墓碑が建てられています。

藤村忌

大磯町観光協会主催で、毎年命日の８月22日に藤村を偲び、墓参・献花が行われています。

《墓石》高さ81cm、11cm角。
建築家谷口吉郎氏の設計により昭和24年8月22日に建立。





旧島崎藤村邸

所在地　：神奈川県中郡大磯町東小磯88-9
開場時間：9時 ～ 16時
休場日　：月曜日(祝祭日の場合は開場)
　　12/29～1/3
問合せ　：大磯町役場　電話　0463-61-4100

isotabi　検索

「余にふさわしき閑居なり」

旧島崎藤村邸

～静の草屋～

藤村邸は大正後期から昭和初期にかけて建築され、周辺には同じような貸別荘が数軒あり、一帯は「町屋園」と称されました。

萬事閑居簡素不自由なし

静子夫人宛ての書簡のなかで藤村はこう表現しています。

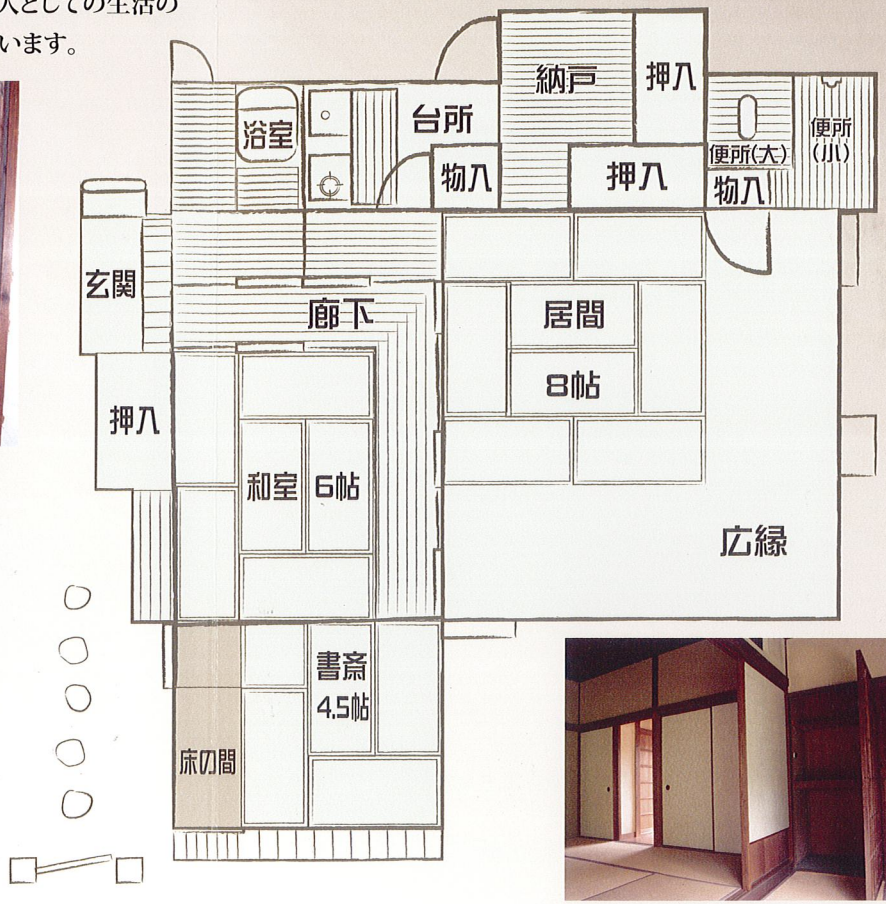
小さいながらも素朴な冠木門を通れば、割竹垣に囲まれた小庭、そしてわずか三間(みま)の古びた平屋建ての民家が目に入ります。

昭和初期の一般家屋よりも天井の高さが一尺ほど低く茶室風に造られた四畳半の小座敷は、書斎として使われました。この部屋からは簡素を信条とする藤村の気配りがもっとも感じられます。

夫人は「大磯の住居は50年に及ぶ主人の書斎人としての生活の中で、最も気に入られたものだったろう」と述べています。

海側の窓を開くと居間兼寝室には涼風がそよぐ。
この部屋で「涼しい風だね」と静子夫人に告げて最期を迎えた

書斎　「この書斎を離れるときは自分がこの世を離れる時だ」とお気に入りだった



“ベニカナメ”や“ドウダンツツジ”など当時のまま。“クチナシ”などの白い花を好み、中でも春の白椿をもっとも愛惜した

「開かずの間」と言っていた物入。見つけた時はたいそう喜び、本棚として使った

島崎藤村（1872-1943）

明治5年、信州木曽の馬籠村(現・岐阜県中津川市)に生まれる。『若菜集』や『破戒』、『春』など著作多数。『落梅集』の一節にある『椰子の実』や『千曲川旅情の歌』は歌としても親しまれています。
『東方の門』執筆中に倒れるまでの2年半余りを大磯で過ごし、最期を迎えました。

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり
『初恋』
写真：国立国会図書館所蔵

左義長見物に来て… 大磯に住む

昭和16年1月13日、藤村は神奈川県湯河原町に休養に訪れる途中、友人に誘われ大磯の左義長見物に立ち寄りました。
これを機に大磯での生活を決意し、2月25日に敷地面積145坪に建つ24坪の長屋を毎月家賃27円で借り受け、翌年の8月には、当時のサラリーマンの約30年分の給料に相当する1万円でこの邸宅を買い取り、終の棲家としました。
時を同じくして大磯に住んでいた作家の菊池重三郎や画家の安田靫彦らと親交が深く、藤村邸を度々訪れていた画家、有島生馬とは縁側に座ってよく話をしていたそうです。

藤村亡き後の居住者　高田保

藤村亡き後、箱根に疎開するまで静子夫人が住んでいましたが、昭和24年より作家の高田保が住み始め、著書『ブラリひょうたん』はこの家で大部分が執筆されました。
昭和27年に保はこの家で亡くなり、その後は静子夫人が昭和48年に亡くなるまで暮らしました。

戸袋の形は半瓢箪形

珍しい萩の枝で作られた下地窓

今は希少な大正ガラス